

## 優 秀 賞

「ぴいばあちゃんの目当て」

登米市立佐沼小学校 四年 岩渕 いわぶち 禅士 ぜんど

六月に、弟が生まれました。ぼくは、四人きょうだいで、ずっとすえっ子だったので、弟が生まれてうれしかったです。ばあちゃんの家に行くときぴいばあちゃんがいいます。八十五才です。生まれたての弟を軽々とだっこして、

「んこー。」

と何度も話しかけていました。ぼくは、

「んこー。」

という言葉を聞いて、意味がわからなかったのです。ぴいばあちゃんに聞きました。

「むかしから、赤ちゃんが話しやすい言葉なんだよ。」

と教えてくれました。ぼくやお兄ちゃん、お姉ちゃん、お母さん、ばあちゃんもそうして話しかけられながら、育つたと聞いてびつくりしました。それから、たんこぶができた時さとう水をぬると良いことも教えてくれました。ぴいばあちゃん、物知りだと思いました。お母さんが、

「生きた図書館だね。」

と言いました。図書館にもない、すごいちえを持っていると、ぼくは思いました。

ぼくたちきょうだいは、ぴいばあちゃんとなくなったぴいじいちゃんに、ランドセルを買ってもらいました。ぼくは、ぴいばあちゃんに、

「長いきして、弟のランドセルも買ってあげてね。」

とおねがいました。ぴいばあちゃんは、にっこりして、

「まだまだがんばらないとね。」

と言いました。お母さんが、

「目ひょうや目当てがあると、生きる力になるんだよ。」

と教えてくれました。これからも目当てを持って長生きしていろいろなちえを、ぼくたちに教えてほしいです。